

## 『オタマジャクシ』のお母さん

佐々木 元

父の代より保育園を初めて50年余、子ども達とのふれ合いの中で、心に残って忘れられないエピソードが多くあります。

その中の一つ、今は息子がやっている園児の送迎バスを運転していた頃のエピソード。運行の途中に左右確認の為一旦停止するT字路がありました。その道路の角の所に、少し深めの水溜りがあり、「オタマジャクシ」がたくさんいました。子ども達は毎日そこへ来ると、「もっと止まっとって」と言って、みんなで「オタマジャクシ」の見える窓側のガラスに顔をつけ、いろんな事を言いながら見ていました。そんなある日、昔からいるガキ大将といったようなとても元気のいいT君が、大きめの青蛙を持ってバスに乗ってきました。運転席の横の席に座り、フロントの上に蛙を置いて、突いて跳ねさせようとしたり、ガラスに張り付けようとしていましたが、もう散々いじりまわされ、グッタリしている蛙はビクともしません。「アーアー、この子に捕まってかわいそうに」と思い、「保育園に着いたら逃がしてやんなれ」と言ったりしました。いつものように「オタマジャクシ」のいる所で止まると、T君は「ちょっと待っとって」と言って、保育士にドアを開けてもらって外へ飛び出していきました。少し経つと、ニコニコと満面に笑みをたたえて帰ってきて、「いつもオタマジャクシ見とったら、お母さんちっともおらなんだで、かわいそうやったで、お母さん連れてきてやった」と言っていました。

大人になった私達がいつの間にか忘れてしまった事に、ハッと気付かされる事の多い子どもの世界です。